

令和7年度 島根県立大学 入試対策 類題演習6（標準難易度）

国際関係学部 国際関係学科 国際関係コース テーマ：多様な「正義」と共生のジレンマ

【問題】次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えなさい。

私たちは今、インターネットや交通手段の発達によって、世界中の人々とすぐにつながることができる「グローバル化」の時代に生きています。違う国の人とビジネスをしたり、SNSで意見を交わしたりすることは当たり前になりました。これは、お互いに経済的な豊かさを高め合うという「利益の体系」においては、大きなメリットをもたらしています。

しかし、人々の交流が深まれば深まるほど、実は「分かち合えないもの」も浮き彫りになってきます。それが、それぞれの国や地域が長い歴史の中で築いてきた「常識」や「価値観」です。高坂正堯が指摘するように、国家は単なる力のまとまりや経済の道具ではなく、独自の「正義」を持つ「価値の体系」でもあります。ある国では「当たり前」とされていることが、別の国では「許されないこと」であるという事態は、国際社会において日常的に発生しています。

このような対立に直面したとき、私たちはつい「どちらが正しいか」をすぐに決めたくなります。自分たちと違う考え方を持つ相手を「悪いもの」と決めつけ、それを排除すれば平和が来ると考えるのは、とても簡単で魅力的な誘惑です。しかし、筆者はこれを^(a)「知的な怠惰」^{**}と呼びます。複雑な問題の背景にある、相手なりの正義や歴史を考えようとせず、安易な正解に逃げ込んでしまうことは、本当の意味での解決を遠ざけるからです。

現代の多文化共生社会において、私たちは一つの大きな^(b)「相克（ジレンマ）」^{**}を抱えています。それは「自分たちとは違う価値観をどこまで認めるべきか」という問いです。何でも自由に認めることができ「寛容」だと思われがちですが、もし相手の価値観が「他人の自由を奪うもの」であった場合、それを認めることは自分たちの社会を壊すことにつながりかねません。逆に、自分たちの価値観を押し通そうとすれば、それは相手への差別や抑圧になってしまいます。

この難問に向き合うためには、まず「自分自身の輪郭」を知る必要があります。違う考え方を持つ他者と出会うことは、自分たちがどのような常識（価値の体系）に縛られているかを気づかせてくれる「鏡」のような役割を果たします。他者を通じて自分を見つめ直す、この^(c)「自画像の更新」^{**}という知的労働を続けること。それこそが、正解のない多極化する世界において、暴力ではない形で平和を維持し続けるための唯一の道なのです。

【設問】

問1 下線部(a)について、筆者はなぜ「知的な怠惰」という言葉を使っているのか。その理由を、文章中の言葉を用いて150字以内で説明しなさい。

問2 下線部(b)について、筆者が述べる「相克（ジレンマ）」とはどのような状況を指すか。文章全体の内容を踏まえて、200字以内で説明しなさい。

問3 下線部(c)にある「自画像の更新」について、あなたはどのように考えますか。これまでの学校での学び（世界史や公民、総合的な探究の時間など）や、日常生活での経験を具体的に一つ挙げながら、多文化共生に必要な姿勢について、600字以内で述べなさい。

【指導・添削のポイント】

1. 問1（要約力）：

- 「相手を悪と決めつける」「複雑な背景を考えない」「自分たちは変わらなくて良いという安易な正解に逃げる」といった要素が含まれているかを確認します。

2. 問2（構造理解）：

- 「違いを認めたい（寛容）」という思いと、「自分たちの社会や自由を守りたい（防衛）」という思いがぶつかり、どちらを選んでも不都合が生じる「あちらを立てばこちらが立たぬ」の構造を書いているかを見ます。

3. 問3（論理的思考力と自己相対化）：

- 島根県立大特有の「自画像」の概念を理解できているかが鍵です。
- 単なる「外国人と仲良くする」という結論ではなく、「他者との違いを知ることで、自分たちの常識の偏りに気づき、自分の考えをアップデートする」というプロセスが書けていれば高評価になります。